

デザインチームとしての活動を通じた学生教育の実践研究

A PRACTICAL RESEARCH ON EDUCATIONAL EFFECT OF DESIGN TEAM ACTIVITIES THAT BASED ON PARTICIPATING IN EXHIBITIONS

田頭 章徳 デザイン学部プロダクトデザイン学科 助教
見明 暢 デザイン学部プロダクトデザイン学科 助教
馬場田 研吾 元・デザイン学部プロダクトデザイン学科 実習助手
松本 雄樹 元・デザイン学部プロダクトデザイン学科 実習助手
久慈 達也 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 非常勤講師
さくま はな 先端芸術学部クラフト・美術学科 助教
山本 忠宏 先端芸術学部まんが表現学科 助教

Akinori TAGASHIRA Department of Product Design, School of Design, Assistant Professor
Nobu MIAKE Department of Product Design, School of Design, Assistant Professor
Kengo BABATA Department of Product Design, School of Design, Former Assistant
Yuki MATSUMOTO Department of Product Design, School of Design, Former Assistant
Tatsuya KUJI Department of Visual Design, School of Design, Adjunct Lecturer
Hana SAKUMA Department of Crafts & Arts, School of Progressive Arts, Assistant Professor
Tadahiro YAMAMOTO Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Assistant Professor

要旨

デザインチーム”Design Soil”は、”Lagrangian Point”（ラグランジュ・ポイント）というテーマで3年連続 Salone Satellite に出展を果たし、過去の作品も、ミラノでの選抜展への選出、作品集への掲載等の成果を挙げた。

今年度は、ミラノサローネに複数回参加している学生を中心に、例年以上に自主的に高い意識を持って展示会の準備をして臨んでおり、継続した Design Soil の活動を通じて、学生たちが自身の目標設定をより高い位置に設定し、自発的に成長していく事が確認できた。また、そのように努力を重ねれば、世界の舞台にも手が届くという、当たり前だが現在の教育で教えられなくなった事実を体感するという事は、大変大きな価値だと言える。

また、今年度は学生作品の商品化、企業と Design Soil との新商品開発プロジェクトのスタート等、新たな展開が生まれている。これらは展示会出展が生んだ成果であり、なおかつ、展示会出展と同等のモチベーションの向上と成長を促すものである。次年度以降も展示会出展と合わせて、プロジェクトへの発展を押し進め、学生が成長する場を生み出していきたい。

Summary

A design team “Design Soil” participated in Salone Satellite for the third consecutive year with the theme “Lagrangian Point”. And a couple of past student’s works were selected for other exhibition in Milan and so on.

In this year, student members of Design Soil especially who has participated in Salone Satellite in the past prepared and managed exhibition independently. Students become to set their aim higher and they become to train themselves voluntarily through continuous Design Soil activities. And it is a worthwhile experience that effort gives us worldwide recognition as a designer. It is the natural low but it had become not to be taught in Japanese modern education.

In this year, we start some new projects, such as commercialization of student’s work or co-development between some manufacturers and Design Soil. They are results of participation in exhibitions, and they encourage students to motivate and develop themselves. For this reason, we will continue to participate in great exhibitions and development into new projects for create a situation what students develop more and more.

1) 目的

2010年に研究メンバーおよび選抜学生で組織したデザインチーム「Design Soil」の、Milano Salone (ミラノサローネ)を始めとした国内外の展示会出展などの活動を通じて、参加学生の成長、さらには大学全体の活性化を計るための教育方法論を見いだすことを目的とする。本稿では、昨年度に引き続き活動を行っている Design Soil の 2013 年度の活動を通じた成果と、学生への教育効果をまとめ、次年以降に繋げる為の考察を行う。

2) Design Soil について

Design Soil は、2010年6月に本研究メンバーを中心に立ち上げたデザインチームである。Design Soil では、教員と学生が等しくチームを作り上げるメンバーとして、ともに出展に耐えうる質の高いデザインを追い求めていく中で、指導する、されるという通常の大学カリキュラムの枠では得られない質と教育効果を狙う。

Design Soil では、実習授業や他のプロジェクトとは異なり、即商品化が可能なレベルまでデザインを詰めていくことや、大学名を冠せずに、プロのデザイナーが集まる世界最高峰の選抜展に、学生としてではなくプロのデザイナーとして出展を行うこと、展示会場では、学生としてではなくプロのデザイナーとしての振る舞いを要求することを特徴としている。

3) 2013年ミラノサローネ出展テーマについて

2013年4月に、ミラノサローネ本会場内で開催される、若手デザイナーの選抜展、「Salone Satellite」(サローネ・サテリテ)に出展したコレクションのテーマは、「Lagrangian Point」(ラグランジュ・ポイント)とした。

1772年、ジョセフ＝ルイ・ラグランジュは『三体問題に関するエッセイ』の中で、公転する主星と従星の間に存在する、重力場と遠心力が釣り合う点「ラグランジュ・ポイント」を示した。この点に置かれた物体は平衡の状態となり、相対位置を変えずに公転し続けることができる。様々な力の交差の中に見出される静かなる安定は、天文学

だけの話ではなく、身近な空間にも見つけることができるはずである、という観点から、一見すると不安定な力や構造に潜んでいる平衡点を探り出すことを通して作品を制作した。様々な力が交錯した不安定な状態の中に存在する、平衡を保つ”ある条件”の探求を通じて11作品をデザイン・制作し、提示した。これらを通じて、身の回りに存在する様々な力の振る舞いに着目することで、新たな可能性が生まれるということを示した。

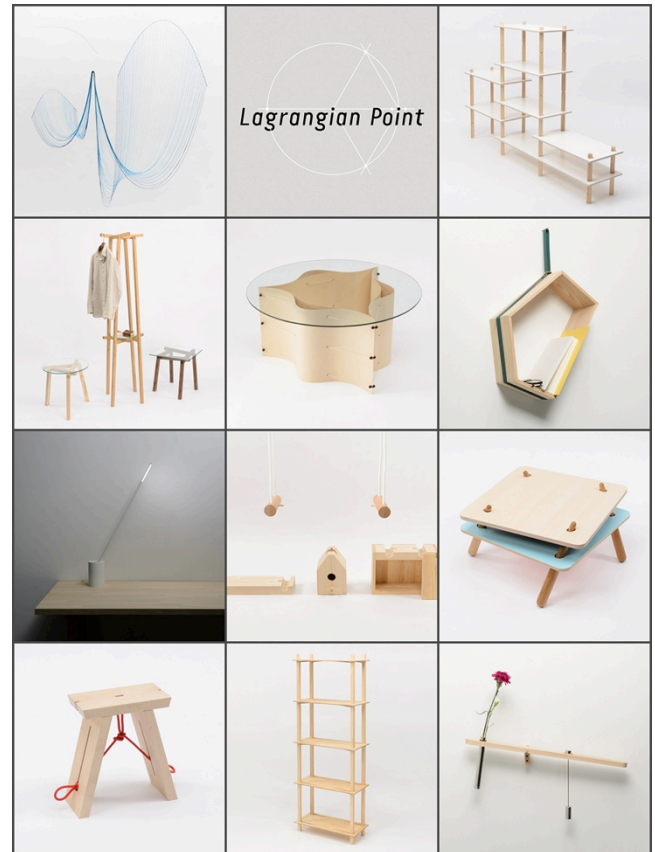


写真1 2013年4月のSalone Satelliteで発表した「Lagrangian Point」コレクションの全作品。

4) 出展展示会の内容と成果

2013年4月9日から14日まで開催されたミラノサローネにおいて、Salone Satelliteに3年連続の出展を果たし、デザイン関係者やメディアの注目を集めた。ミラノサローネで展示をした作品のうち、ふたつの作品がイタリアのデザイン誌 INVENTARIO No.08 の特集ページに掲載された。この特集ではミラノサローネの出展作品から4作品が選ばれ掲載されているが、このうち半分が Design Soil の作品であった。

2012年のミラノサローネで展示をした作品についても反応があった。ひとつは、2013年のミラノサローネの時期にミラノの美術館 Museo Poldi Pezzoli で開催された、「本」をテーマにした企画展「Around the Book」展の展示作品に選定され、名だたるデザイナーの作品と共に展示された。別の作品は、香港の出版社 Victionary から出版された、世界中からキッズデザインの秀作を集めた作品集「Just Kidding」に掲載された。学生の作品がこれらの展示会に選定されたこと、出版物に掲載されたことは快挙であると言ってよい。



写真2 2013年4月の Salone Satellite 展示風景。



写真3 2013年4月にミラノの Museo Poldi Pezzoli で開催された「Around the Book」展における Design Soil 学生作品の展示風景。

その後、2013年6月1日から30日まで、大阪の大阪府立住まいのミュージアムで開催された関西の若手建築家、クリエイターの選抜展「住まいをデザインする顔」展

に出展者として招待された。ミラノサローネへの継続的な出展が評価されての招待である。また、2013年6月25日から7月2日まで、神戸芸術工科大学ギャラリーセレンディップにおいて、これまでの3年間の全作品を展示する作品展「The Soil of Design Soil」展を開催し、引き続き、2013年7月8日から14日まで、KIITO で開催された「国際インテリアデザインシンポジウム」会場内においても、同作品展を開催した。



写真4 2013年7月の国際インテリアデザインシンポジウムにおける展示風景。

5) 展示会への継続出展を通じた学生の成長

Salone Satellite 展示ブースでは、例年通り、学生たちが主体となって、来場者に対して積極的なプレゼンテーションを行った(写真5)。今年度は、ミラノサローネに複数回出展している学生メンバーを中心に、教員の指示を待たずに自発的に計画・行動するケースが増加した。プロジェクトや作品の説明に加えて、想定される質問等についても事前に学生間で議論し、英語でやり取りができるように準備を進めており、英語が話せなかった学生たちも例年以上に来場者とスムーズなやり取りをしていた事が印象深い。Design Soil の活動に参加し、自身の作品をプレゼンテーションするということ、Design Soil という看板を背負っている事を、教員が思っている以上に意識し、実践に移してくれていた。レベルの高い環境が学生たちの成長を促し、継続的に出展している事で、学生たちの中でも知識や経験が蓄積し、より効果的な成長に繋がってきていると考える。



写真5 Salone Satellite 展示ブースで、来場者に英語で解説をする学生。

6) 海外への意識の醸成

Design Soil メンバーとして、ミラノサローネに作品を出展した学生たちが、続々と海外に進出している。提携校であるドイツのヴァイセンゼー美術学院に2名の学生が立て続けに交換留学するのに加えて、CUMULUS 連携校でもあるスイスのローザンヌ美術学院・大学院に留学する学生も現れた。これらの学生達の海外進出の意識を醸成したのは、ミラノサローネへの出展と展示会の場で経験した評価や批評を通して、自信を持てるようになったことと、より強い向上心を抱くようになったと考えられる。

7) 学生作品の商品化、企業とのプロジェクトへの発展

今年度のミラノサローネに出展した複数の作品の商品化プロジェクトがスタートし、商品化に向けて着々と進行している。近いうちに、在学中の学生作品の商品化と、ロイヤリティ契約が実現する見込みである。

継続的なミラノサローネへの出展により、複数年に渡って見てくださっていた企業からも信頼を得られるようになり、複数の企業から、新商品開発のプロジェクトへの参加要請を頂いた。いずれも大学ではなく Design Soil を指名したプロジェクトであり、この事実も学生たちのモチベーションの向上に大きく寄与すると考える。

また、3名の Design Soil 参加学生個人に対して、イタリアのトップブランドの一つから、新商品開発プロジェクトのデザイナー指名コンペへの招待があった。世界的な家

具メーカーから、学生に対してコンペ参加要請があるという事は快挙と言ってよい。

8) まとめ

今年度は、例年同様、Design Soil の活動を通じて学生たちが、自身の目標設定をより高い位置に設定し、自発的に成長していく事が確認できた。また、そのように努力を重ねれば、世界の舞台にも手が届くという、当たり前だが現在の教育で教えられなくなった事実を体感するという事は、大変大きな価値だと言える。

また、今年度は学生作品の商品化、企業と Design Soil との新商品開発プロジェクトのスタート等、新たな展開が生まれている。これらは展示会出展が生んだ成果であり、なおかつ、同等のモチベーションの向上と成長を促すものである。次年度以降も展示会出展と合わせて、プロジェクトへの発展を押し進め、学生が成長する場を生み出していきたい。